

# 官邸崩壊

高嶋哲夫

第七回

## 第六章 ネイビーシールズ

1

明日香に向けられていた男の手が下がり、銃が床のコンクリートに落ちて乾いた音を立てた。男が膝をつき、崩れるように倒れた。

振り向くとスーザンが立っている。手に拳銃を持って――。

「あんた、なにしてるの」

「銃撃戦が始まったから戻ってきた」

「ゲッダウン」

身体を低くして叫ぶと同時に、明日香はスーザンの身体を押し倒した。柵を砕く銃弾の音と、頭上を銃弾が飛ぶ空気の振動を感じる。

倒れた男が二人に銃を向けている。明日香はスーザンの拳銃を取ると、男に向けて全弾を発射した。

柵にもたれて死んでいるテロリストの横には、三基のSMAWロケットランチャーと暗視スコープが転がっている。

前庭からは激しい銃撃戦の音が聞こえてくる。警視庁のSATとテロリストの銃撃戦は激しさを増していた。時折、爆発音が聞こえた。どちらかが投げた、手榴弾の破裂音だ。

「逃げてください。このままでは全滅します。敵は暗視スコープとロケットランチャーも持っています。新たなドローンが来ます」

明日香はスマホを使って横田に呼びかけた。横田のスマホも通話モードになったままだが、返事はない。

柵から身を乗り出すと、正面玄関の横からドローンが飛び立つのが見えた。ライトを消してあるので、官邸外からでは見えないのだろう。ドローンには赤外線カメラが積んであるのか。

明日香はロケットランチャーを取ると、前庭のテロリストに向けて発射した。爆発音と共に悲鳴に似た叫び声上がる。

庭から突然、銃撃音が消えた。

テロリストも撃つのを止めている。

〈撤退する。全員、塀側に戻れ〉

スマホから横田の声が聞こえる。

「なぜ逃げなかったの」

「あなたたちを置いて、一人では逃げられない。私も一緒に――」

明日香はスーザンの腕を引いて身体を低くした。一機のドローンが屋上に向かってくる。屋上の異常に気づいたのか。

明日香はテロリストの短機関銃を取るとドローンに向けて連射した。

ドローンが飛び上がるように跳ね、墜落していく。

明日香は、テロリストが持っていた暗視スコープと手榴弾をデイバックに詰めた。

デイバックをスーザンに持たせると、明日香はロケットランチャーを両肩に一基ずつ担いだ。二基で十六キロの重さが両肩にかかる。

一瞬よるめいたが、何とか踏ん張った。

「四階に戻る。ここにはすでにテロリストが向かってるはず」

明日香はスーザンの腕をつかんで、建物内に入った。五階に降りたところで、階段を駆け上ってくる音がする。

「テロリストが上がってくる。どうやって四階に戻るのよ」

スーザンが泣きそうな声を出す。

「入って」

階段の横にある部屋のドアを開けて、スーザンを押し込む。

明日香は二個の手榴弾のピンを抜いて階段の方に転がすと、自分も室内に滑り込んだ。

爆発音が連続して響く。

四階の部屋に戻ると、高見沢が目を閉じている。こんな無防備な高見沢を見るのは初めてだった。かなり苦しいのだろう。

明日香がロケットランチャーを下ろすと目を開けた。

「戦争でも始めるつもりか」

「もう始まっています。屋上にあつたのを持ってきました」

明日香は屋上でのことを話した。

「スーザンを逃がすのは無理でした。彼らは赤外線カメラ搭載のドローンを使って、庭中を見張っています。防犯カメラの死角をつくともできません。警視庁のS A Tの侵入も察知していて、攻撃してきました。ドローンは三機を撃ち落としましたが、まだ持っているでしょう」

「ここから見ていた。攻撃型のドローンでなくてよかった」

高見沢が窓に目を移す。

最近では自動小銃を組み込んだ戦闘用ドローンも出ている。ドローンのカメラがスコープの役割をして、目標を攻撃できるのだ。

「屋上には何人いた」

「四人です。四隅に一人ずつ。もっと人数を割くべき場所ですが、それだけでした。テロリストの人数は、大したことはないでしょう」

「甘く見るな。何かが起これば、直ちに屋上に人員を送ることになっていたんだ。おまえは運がよかった」

おそらく、高見沢の言葉通りだ。今ごろは、新しい要員が送り込まれている。さらに優秀な者たちだ。

「なぜ、戻ってきたの。戻るべきじゃなかった」

明日香は声を潜めて、再度スーザンに聞いた。

「上であんなに撃ち合ってたのよ。気にするな、なんて無理な話。」

私に戻らなきゃ、あなたは死んだ」

明日香には反論のしようがなかった。命を救われたのだ。

「ドローンで見張られてたのよ。あのまま降りてたら、テロリストに捕まってたかもしれない」

高見沢が天井のスピーカーに視線を向けた。英語の音が聞こえてくる。

〈夏目明日香警護官、この放送を聞いているか。私たちは今、おまえの行動に腹を立てている。殺したくてうずうずしている。お前から言うことはないのか〉

明日香が無線機を取った。高見沢がその腕をつかむ。

「答えるな。おまえを挑発しているだけだ」

〈屋上の兵士とドローンはやられたが、私たちもS A Tの奴らを大量に殺してやった〉

声<sup>うかが</sup>が途切れた。明日香の出方を窺っているのだ。

〈今度、私たちの前に姿を出せばその身体をズタズタにしてやる〉

一発の銃声と共にスピーカーは沈黙した。

警視庁の対策本部は静まり返っていた。

全員の目が中央の大型ディスプレイに注がれていた。S A Tの隊員のヘルメットに装着したカメラ映像だったが、現在は植え込みを映したまま動かない。

官邸内部から聞こえていた銃撃の音も消えている。

「どうなっている。現場本部に問い合わせろ」

警視庁幹部が怒鳴るような声で言うと、職員が慌てて受話器を取った。

「やはり無理があったようですね」

梶元がぼつりと言った。

「防犯カメラの死角をついたのですが、テロリストは赤外線カメラを搭載したドローンを飛ばして、庭を見張っていたようです」

受話器を耳に当てたまま職員が言う。

「S A Tの隊員はどうなりましたか」

「かなりの死傷者が出た模様です。詳しいことが分かり次第、報告が来ます」

梶元は背筋を伸ばして、再度ディスプレイに映る官邸に目を向けた。

官邸前の指揮車では、横田たちが食い入るようにモニター画面を見ている。

二十メートルも離れていない塀の中で銃撃戦が行われていたのだ。爆発音も何度か聞こえた。手榴弾ばかりではなく、ロケット弾もあった。あれはテロリストのものか。

「生還者は何名だ」

「現在は五名。全員、負傷しています。二人は重傷です」

「十五名中、五名か。三割の帰還か。ドローンを飛ばして官邸内を

見張っていたとはな。内部の者は気付かなかったのか」

「夏目が撃ち落とさなければ全滅していた」

横田が拳でデスクを叩いた。

明日香たちは四階の部屋でぐったりしていた。

耳の奥にはまだ銃撃戦の音が残っている。あれだけの犠牲者を出しながら、スーザンを脱出させることができなかった。すべて、自分の責任だ。

〈夏目明日香警護官、きみはよくやってる。褒めてやる。しかし、きみの仲間のS A Tは全滅に近い。地下に埋まっている者たちと同じだ〉

ライアンの声が聞こえる。

〈おまえがワシントン・ポストの記者、スーザン・ハザウェイと一緒にいることも分かっている。二人で出て来ないか。お互いに無駄を省はぶこうじゃないか。私はおまえの仕事に敬意を払っているんだ。おまえたちが出てくれば、人質の半数を解放しよう。老人と女、そして負傷者だ〉

「嘘だ。惑わされるな。彼らは必ず全員を殺す」

高見沢がかすれた声を出した。

〈おまえたちが四階か五階にいることは分かっている。おまえたちは下には降りて来られない。階段もエレベーターも我々が固めている。今から三十分待ってやろう。事態は次の段階に移る。二人でし

っかり考えろ」

「次の段階って何なのよ」

スーザンが震える声を出した。

「これから、私たちは三十分ごとに人質を一人処刑する。おまえが出てくるまで、この処刑は続ける。この放送は官邸全体に流れている。もちろん大ホールの人質たちも聞いている。返事をしろ」

しばらく沈黙が続いた。

「あとになって、聞いていなかったとは言わせないぞ」

女性事務員を連れてくるように命令する筒井の声が聞こえる。

誰かが連れて来られた気配がした。

「こいつを殺す。三十分たつと五分ごとに一発を撃ち込む。まず足だ。次に腕。そして、腹だ。心臓は最後だ。その様子は、生放送してやる。それを聞きながら震えているのもいい」

「やめて、殺さないで。私には小学生の子供がいるの」

女性の悲鳴のような声が聞こえる。官邸の女性職員だろう。

「静かにしろ」

筒井の言葉が終わらないうちに銃声が響いた。悲鳴と共に、人が床に崩れ落ちる音がする。

明日香は思わず立ち上がった。

「放っておけ。おまえが出て行っても人質はいずれ全員が殺される。最初はおまえだ」

高見沢が言った。



「見殺しにするなんて無理です。私はどうすればいいんですか」

「見殺しが無理なら、解決方法を考えろ」

高見沢が苦しそうな声を出した。肉体的な痛みと共に警護官班長としての精神的な苦しみも味わっているのだ。

部屋の中を歩き回っていたライアンが立ち止まった。

「放送から何分だ」

「二十五分です」

「女を立たせろ」

部下に命じ、拳銃を握った。

人質の間にざわめきが広がる。さっきの放送を聞いていたのだ。

「夏目明日香護衛官。これから起こることは、すべておまえの責任だ。おまえの臆病のせいで人質が死ぬことになる。子持ちの若い女だ」

ライアンが英語で、筒井がそれを日本語に訳した。

2

ホワイトハウス、大統領執務室は静まり返っていた。

大統領を囲んで、首席補佐官、国防長官、CIA作戦本部の対テロセンター部長がいた。

日本の警視庁、SATの攻撃の失敗はすでに報告されていた。

「我が国の特殊部隊が攻撃を仕掛けて、人質を奪還できる確率は」  
「こういうケースは非常に難しい作戦になります。おまけに、人質が囚われているのは日本の官邸です。公に軍事作戦をとるのが非常に困難な国で——」

「人質を無傷で救出できる確率が知りたい」

大統領は国防長官の言葉を遮った。彼は三年前まで海軍大将だった。現役を退いてからも軍事顧問として参謀本部に関わり、強い影響力を残していた。

「現在の状況だと非常に低いかと。テロリストはすでに相当数の者を殺害しています。殺害に躊躇ちゆうちゆうしないプロ中のプロです。十パーセントを切ると思われます」

「この確率を上げるには——」

「日本の全面的な協力が得られれば、三十パーセントには上げるこ  
とが可能です。まず、官邸の詳細な見取り図と防御システムについ  
ての情報提供です。この場合、囚われている新崎総理の安全保障が  
問題になります」

大統領は考え込んでいる。これではまだ低すぎる。

「救出目標を一人に絞れば成功率はどのくらい上がる。つまり、新  
崎総理を含めた他の人質の生死にかかわらずということになれば」

「成功率、七十パーセントというところでしょう。救出ターゲット  
が明確であればの場合です」

「その線でさらに検討できないか。成功率を上げたい」

「救出の対象は、アンダーソン国務長官ですか。それとも駐日大使

——」  
「無傷で救い出してほしいのは、この女性だ」

大統領は一枚の写真とメモに書いた名前を国防長官に渡した。

「作戦を実行するとなればどのくらいかかる」

「時間は大してかかりません。シールズがすでに日本の現場対策本部に待機しています」

「その部隊を動かせばいい。日本側に悟られることなく」

「救出作戦には日本側の協力が必要です。単独行動では無理です」

「日本政府からスーザン・ハザウェイに対する問い合わせが来いています。彼女はワシントン・ポスト紙の政治部の記者です。その旨だけを回答していますが、さらなる問い合わせが届いています」

首席補佐官の言葉に大統領は考え込んでいます。

「テロリストは彼女をプリンセスと呼んでいるようです」

間違いない、大統領は確信した。スーザンは、私の娘だ。おまけに、テロリストたちはその事実を知っている。彼女を確保して、私に脅しをかけようとしている。

大統領は意を決したように顔を上げて首席補佐官を見た。

「現在、日本側の最高指揮官は梶元副総理と考えていいんだな。彼と極秘で話せないか。記録はなし、通訳だけを交えてということだ」

秘書がデスクの電話に手を伸ばした。

梶元との電話はすぐにつながった。

「緊急事態が発生した。我々は自国の者たちの救出を実行したい」  
「もう少し、待っていただけませんか。現在、官邸内部に潜んでいる警護官と連絡を取り合っています」

「そんな話は、聞いていない。情報は共有するのではなかったのか」  
「こちらこそスーズン・ハザウェイという女性についての情報をお願いしていますが、未だに届いていません。ワシントン・ポストの女性記者です。調べるのに手間のかかる相手ではないはずですよ」

梶元がかつてなく強い口調で言う。

「分かり次第、報告しよう。官邸に関することを教えてくれ。見取り図はもとより、防御システムを含むすべてのことだ」

「どうするつもりなのです。あなたたちは単独で――」

「S A Tの攻撃はことごとく失敗している。我が国には立て籠もり人質事件に対する専門の部署もある。たとえ作戦が失敗して、総理がテロリストの犠牲になっても、あなたの肩書から〈副〉が消えるだけだ」

「私の唯一の仕事は、総理をはじめ人質の命を救うことです」

梶元の言葉からは嘘ではない意思が感じられる。

「意図は分かりました。より多くの詳しい情報があれば、我々もあなた方の攻撃に対してアドバイスが可能です。プロとしてのね」

「送りましょう。ワシントン・ポストの女性記者についての情報もお願いします」

大統領は電話を切った。

「甘い奴だ。せっかく最高の提案をしてやったのに。情報が入り次第、攻撃準備をしてくれ」

「さらに詳しい作戦と成功確率を検討します」

国防長官は敬礼をして出て行った。

横田は後方に並ぶ機動隊の輸送バスから、部下に視線を移した。

三台の輸送バスには横須賀基地から派遣されたアメリカ海軍、ネイビーシールズの隊員、三十名が待機していた。

「なんで、陸軍のデルタフォースでなく、海軍のシールズなんだ」

横田は隣にいた部下になにげなく聞いた。

「たまたま日本近辺にいたからではないでしょうか。陸軍のデルタフォースはアメリカ本土に基地があるはずです。朝鮮半島有事のため、シールズは韓国にも駐留しています。国務長官が日本で人質になったので、緊急派遣されたのでは」

「デルタフォースより、シールズの方がこの作戦には成功率が高いからじゃないのか」

「どっちも同じようなものです。軍の特殊部隊は人質救出よりも、テロリスト制圧や殺害の集団です。彼らが動けば、必ず多くの死傷者が出ます」

部下の一人が横田に説明した。横田の気は重くなった。たしかにそうなのだ。

「シールズのテロリストの制圧方法を知ってるか」

「かなり強行です。まずヘリで急襲して、閃光弾や催涙弾さいるいだんを撃ち込んで、敵の視覚と聴覚をつぶして混乱させます。ドアを破壊し、窓があればそこから突入する。銃を持っている相手は、迷わず射殺。それから人質を救出します。人質が殺害されなければの話ですが。ただし、言ったように救出が作戦の目的ではありません。第一の目的はテロリストの制圧です。生死にかかわらず」

「力で制圧するというわけか。犠牲者が出るわけだ」

横田が息を吐いた。

「シールズの動きがおかしいです」

部下の一人が来て、横田の耳元で囁くささや。

「どうおかしいんだ」

「一部を残して、移動しています。使っているのは黒塗りの大型バンです。大使館ナンバーの車です」

「エイブル海軍少佐を呼んできてくれ」

「少佐はすでに出発しています。残っているのは、日米の連絡員と通訳、その他、数人だけです」

「彼らの装備は——」

「持って行った模様です。何も残ってはいません」

「ヘリはどこだ。彼らが横須賀から乗ってきたのはMH47だったな」

MH47はネイビーシールズが使用しているヘリだ。CH47ベ

ースの改良型で、特殊作戦用ヘリだ。

「ビルトンビルのヘリポートに移動しています。外資系の企業が入っているビルです」

「至急、調べさせる。勝手な行動を取られたら困る」

一瞬考えたが、立ち上がった。

「その辺りの者、ついてこい」

横田は叫ぶと、停めてあった覆面パトカーに乗り込んだ。横田に続いて、数名の部下が乗り込む。

ビルの前には十人ほどの外国人の男がたむろしていた。民間人の服装だが、体格がよく、警察か軍関係者と分かる者たちだ。

横田が車から降りると、男たちが取り囲んだ。全員が上着の下に短機関銃を持っている。ネイビーシールズの隊員たちなのだろう。

警察手帳を見せてビルに入ろうとすると、ビルから数名の男が出てきた。一人はエイブル海軍少佐だ。

「これから人質の奪還に向かいます」

「危険すぎる。しばらく待ってくれないか」

「大統領命令です。人質救出作戦を決行するようにと」

「全員の救出は無理だ。救出対象は誰だ。新崎総理か。あるいは、アンダーソン国務長官」

エイブルは黙っている。

「プリンセス、スーザン・ハザウェイか」

横田の言葉にエイブルが反応した。

「申し訳ありませんが、急ぎます」

エイブルは部下を連れてビルに入っていく。

静まり返った夜の都心に、微かにローター音が轟とどろいている。

横田はビルの屋上を見上げた。ビルの間を黒い影が二つ、横切るのが見えた。

警視庁の作戦本部で、梶元副総理は落ち着きなく部屋を歩き回っていた。

「アメリカは単独行動を取るつもりだ。送られてきているシールズを監視するように。特別な行動を取る傾向が見られたら、直ちに報告してください」

「彼らは新崎総理の命を危険にさらすということですか」

「国務長官の救出を一国の総理より優先するなど、考えられないことだ」

「アンダーソン国務長官はドナルド大統領とは友人だと聞いています。だからと言って、日本の総理より優先して救出するなど、許されません」

飛び交い始めた声を聞きながら梶元は考えていた。現在の総理が死ねば、梶元副総理の肩書から、〈副〉が取れるとまで言った。これほどまで、ドナルド大統領が人質救出を望む目的、急ぐ理由は何なのだ。



「そうではないでしょう。彼は我が国に、全面協力を頼んできました。他に目的があるはずです。どうしても救出を望む者がいるのかもしれませんが。もう一度リストを見たい」

秘書官がアメリカ人の人質リストを梶元に渡した。

梶元はすでに何十回も目を通したリストを眺めた。

「夏目明日香警護官が報告してきたスーザンという新聞記者はどうなりましたか。テロリストがプリンセスという暗号名で呼んでいる。大統領に詳しい身元を送るように言っております」

「そのようなものは届いていません。ワシントン・ポストの政治記者ということしか分かっていません。しかし、どうやら何かありそうです。再度の問い合わせに対して、返答がありません」

梶元は人質リストを手に考え込んでいる。

### 3

銃声が轟いた。

スピーカーに対峙していた明日香の身体がピクリと動いた。

（あと、五分だ。この女はおまえが殺すのと同じだ）

スピーカーからライアンの声が聞こえる。背後で悲鳴のような声が上がった。

明日香が立ち上がり、高見沢に向き直った。

「申し訳ありません。私は警護官には向きません」

「止めてもムダだろうな。やはりおまえは警護官には最適だった。責任感が強い。自分を犠牲にしても誰かを護ろうとする」

「私も行かなきゃならないわね。目的は私らしい。テロリストはあなたと私が一緒だと知っている」

スーザンが立ち上がり、明日香の横に並んだ。

「スーザンは残って。あなたはS A Tに救出されたことにする」

「無駄よ。彼らは知ってる。それに、なぜ彼らが私を探しているか知りたくなかった。自分が何者なのかね」

〈覚悟するんだな。夏目警護官は出てくる気はなさそうだ。せいぜい夏目明日香という警護官を恨むんだな。おまえを殺したのは――〉  
スピーカーから聞こえていた、ライアンが女性を脅す声が途切れた。ライアンの背後から部下たちのざわめきの様な声が聞こえてくる。

「なにが起こったの」

「静かに――」

耳を澄ますと、ヘリの音が近づいてくる。

窓の隙間から覗くと、星明かりの中に二機の機影が見えた。

「民間のヘリか？」

高見沢が聞いた。

「いえ、違います。あれは――」

「アメリカ海軍のヘリ、MH47よ。たぶんシールズが乗ってる。奇襲をかける気よ。私たちを助けに来たのよ」

スーザンがはしゃいだ声を出した。

「アメリカはなにを急いでる。日本側はなぜ止めないんだ。テロリストはステインガーミサイルを持っているんだぞ」

高見沢が呻くような声を出す。

「ダメです。引き返させてください」

明日香はスマホを出して横田を呼びだした。

「ヘリはシールズでしょ。まずいです。また、全滅する気ですか」

「我々も驚いてる。アメリカ側の勝手な行動だ」

「帰還するように呼びかけてください。彼らはステインガーミサイルで民間機が撃墜されたのを知っているのですか」

「すべて了解しているはずだ」

「だったらなぜ——。ステインガーミサイルで狙い撃ちされます。すぐに引き返すよう言ってください」

「もう報せている。しかし、ヘリは自国との交信以外は遮断している」

「彼らに呼びかけて。このままでは、また死者が出る」

明日香は電話を切って、銃を持って立ち上がった。

「なにをする気だ」

「ヘリは屋上に降りる気よ。ステインガーミサイルで撃墜される」

「屋上のテロリストは、あなたがやっつけた」

「もう、新たなテロリストを送り込んでいる。屋上が唯一、テロリストの弱点だから」

スーザンが高見沢を見ると頷いている。

「今度はテロリストも用心している。私が屋上に行って、敵を倒すのは難しい」

そう言いながらも、明日香は暗視スコープと二基のロケットランチャーを持ってドアに向かった。

ライアンはつかんでいた女の髪の毛を放した。女が床に崩れ落ちる。恐怖で失神したのだ。

「ヘリが二機、近づいてきます」

部下の声でライアンは窓際に行った。

「米軍のヘリ、MH47だ。乗っているのはシールズだ。一機は正面から攻撃する。もう一機は屋上に着陸してシールズを送り込むつもりだ。正面玄関前と屋上の人員を増やせ。ヘリが攻撃してくる前にステインガーマサイルで撃墜しろ」

官邸内は慌ただしくなった。機材と装備を持ったテロリストが走り回っている。

明日香は暗視スコープをつけて、物音に気を配りながら階段まで行った。

四階から五階に上がっていく。途中、数人のテロリストとすれ違ったが、誰も明日香だとは気付かない。

五階に来ると、中央の部屋に向かって走った。

部屋に入ると、ヘリのローター音が聞こえ、窓に庭からの光が交錯している。壁目がけてランチャーの引き金を引いた。

轟音と共に、壁の一部が吹き飛んだ。近寄ると部屋の一角が崩れ落ちて、暗い空間が広がっている。二機のヘリが近づいてくるのが見えた。

「やった。貫通させた」

明日香は声に出さずに叫んだ。

しかし、テロリストたちも気がついたはずだ。警護官が四階でロケットランチャーをぶっ放した。

顔を上げると東京の夜が広がっている。高層ビルの黒い影が何本も星空に伸びていた。ビルの明かりのほとんどが消えていて、こんなに暗い東京は初めてだった。

ヘリのローターの音が近づいてくる。ほぼ正面に二機のヘリが見えた。一機が急に高度を上げたかと思うと、視界から消えた。

銃撃が始まった。屋上と庭からヘリを銃撃している。やはり屋上には新しい兵士が配置されている。

一機のヘリが官邸正面に近付いてくる。旋回したかと思うと、ヘリの中で兵士がロケットランチャーを構えているのが見えた。明日香はあわてて、身体を壁に押し付けた。轟音と共に部屋の一部が吹き飛び、穴の大きさは倍以上になっている。敵と間違えて撃ってきただのか。屋上でもロケット弾の破裂音が聞こえた。

ネイビーシールズはヘリでロケット弾を撃ち込み、混乱に紛れて

隊員を送り込む気だ。話に聞いていた以上に強引な作戦だ。

「庭にもミサイルを持ったテロリストが潜んでいる」

ヘリが銃撃に気を取られているすきに、ステインガーミサイルで撃墜する。これがテロリストの作戦か。

ヘリの高度が下がる。銃撃はますます激しくなった。

庭を覗くと、数名のテロリストがヘリに向けて自動小銃を撃っている。その横でステインガーミサイルを構えている者がいる。

ヘリのエンジン排気口の周囲から白く輝くいくつもの光源が発射された。フレアだ。

ミサイルが発射されヘリに向かう。途中で大きく軌道を外れ、フレアの中を横切り闇に消えていった。

ステインガーミサイルは、航空機やヘリのジェット噴射による高温の赤外線を検知して追尾する。マグネシウムなど酸化しやすい金属粉末をベースとしたフレアは、エンジン排気口から放射される同じ周波数帯の赤外線を出しながら燃焼するおとし罠だ。

テロリストはロケットランチャーで狙い始めた。ロケット弾だとフレアの影響を受けない。

明日香はもう一基のロケットランチャーを彼らに向けて引き金を引いた。

庭に土煙が上がった。そのとき、上空を炎が横切った。屋上から発射されたロケット弾だ。

ドンという鈍い音とともにヘリの後尾が火を噴いた。ローターの

回転が落ち、機体がゆっくりと回転を始める。

ヘリから数本のロープが投げられ、黒服のネイビーシールズ隊員が降下を始めた。それを目がけて、銃撃が開始される。隊員が次々に落下していく。

ヘリは底の部分を官邸に向け、中庭に墜落した。

数人の隊員が這い出してきたが、銃撃が集中する。銃撃は庭だけではなく、官邸の屋上からもされている。

ヘリから這い出た隊員は負傷しているようだが、反撃している。

〈降伏しろ。これからロケット弾を撃ち込む〉

スピーカーの音が終わると同時に、庭の植え込みから赤い火が走った。

大きな火炎が上がり、庭を明るく照らし出した。

ヘリは二機飛んできたはずだ。もう一機はどこに行った。

屋上の銃撃戦が激しさを増している。フレアでステインガーマシヤイルを回避した一機が官邸正面を攻撃してテロリストの注意を引いている間に、もう一機が屋上に降りたのか。かなりのリスクを伴う強引な作戦だ。なぜアメリカは、こうまでしてネイビーシールズを送り込もうとしている。

明日香は庭のテロリストに向かって弾倉を撃ち尽くすと、部屋を出て階段を屋上に駆け上がった。

屋上に出ると、思わず目をすぼめた。昼間のように明るい。

中央辺りにヘリが墜落して炎上している。

屋上は戦場だった。生き残ったネイビーシールズが必死に反撃している。屋上への出入り口近くにも隊員が何人か倒れていた。

明日香はテロリストに向かって銃を撃ち続けた。

爆発音が轟いた。ヘリのパイロット席が吹っ飛んだ。テロリストが投げた手榴弾だ。

階段を駆け上がってくる足音がする。振り向くと数人のテロリストがロケットランチャーを抱えて現れた。

彼らは明日香の横を走り抜けて屋上に出た。仲間と思っているのだ。

その背後に向けて短機関銃を連射した。

転がっているロケットランチャーを拾い上げて、テロリスト目がけて発射した。

ヘリが爆発を起こした。巨大な炎が屋上に広がる。

明日香が建物に戻ろうとしたとき、倒れていたネイビーシールズ隊員と目が合った。二十歳代の若者で、まだ生きている。明日香は隊員の襟首をつかんで、建物の中に引き入れた。

爆発音が轟いた。屋上の半分が炎に包まれている。ヘリの燃料タンクに引火したのだ。

明日香は隊員を立てさせて、階段を下りた。

シールズの若者の肩を支えながら、四階の部屋に入った。

スーザンが二人のところに駆け寄ってくる。



「この人は」

「シールズがヘリ二機で官邸を急襲した。二機とも撃墜された。一機は庭、もう一機は屋上。屋上でテロリストと戦闘が起こり、その生き残り」

「他の隊員は——」

「たぶん全滅。この人以外は」

「彼、胸と腹に被弾している」

スーザンが高見沢を見ると、首を横に振った。ダメだということだ。

咳をするたびに、口から鮮血が流れ出る。肺を撃たれている。

「俺たちは——大統領の命令で——女性の救出だ」

ポケットを探ると写真が入っている。写っているのはスーザンだ。

「彼らはあなたを救出するために来たっていうの。ここには国務長官も大使もいるのよ」

スーザンは答えない。答えたくとも、何も知らないのだろう。

「この作戦には、日本の警察か自衛隊は参加していないのか」

高見沢の言葉を明日香がスーザンと兵士に伝えた。

「シールズの単独行動だ。官邸内の情報はある。日本政府から入手したと聞いている」

「バカ野郎。ここは日本だ。総理官邸だぞ。防護は俺たちが考えたんだ。なぜ日本側の部隊を入れない」

「俺たちは命令に従うだけだ。最善を尽くした——」

隊員が激しく咳き込んだ。鮮血が辺りに飛び散る。

「死んだ——」

明日香が咳つげくように言った。

スーザンが突然立ち上がった。

「私を助けようとして、何人もの人が死んだのよ。もう、ここに隠れてはいられない。私が名乗り出れば解決する」

「私も行く。一人では行かせられない」

「あなたは関係ない。これは私の問題」

「あなたのためだけじゃない。新崎総理はテロリストに捕らえられている。私は自分の仕事をするために行く」

明日香は立ち上がるうとしてよろめいた。全身の関節が鋭く痛んだ。身体はガタガタだ。

横田は驚きの気持ちを隠せなかった。

二機のヘリとテロリストたちとの銃撃戦が始まったかと思うと、総理官邸の五階の中央の壁が吹き飛んで大きな穴ができた。恐らく、内部からロケット弾を発射したのだ。そこから発射されたロケット弾は、テロリストにも向かった。銃撃もあった。

それがやれるのは、官邸の中にいる者しかいない。明日香がやったというのか。

「官邸を映しているカメラがあるだろ。それを見たい」

横田はバンに入った。

バンの中には十台近いモニター装置が並び、官邸の周りにセットされたカメラの映像を映している。近くの高層ビルに設置したカメラからの映像もモニターされていた。横田は官邸正面をとらえた映像を巻き戻すように言った。

官邸の中央部分が映っている。突然その一角が爆破された。かなり大きな爆発だ。四メートル四方のコンクリートが吹き飛び、巨大な穴が開いていた。

その中に一つの影が立った。穴から身体を乗り出すようにして下を覗いている。テロリストと同じような服を着て顔をスカーフで隠してはいるが、明日香に違いなかった。その後、ヘリからミサイルを打ち込まれ、穴はさらに拡大している。

しかし再度明日香があらわれ、ロケットランチャーを構えて下に向けて発射した。もう一度、下を覗き込むと短機関銃を撃って、その場から消えた。

「巻き戻して、穴の人影を鮮明にして拡大してくれ」

映っている人影は確かに明日香だった。

モニターの一つが明るくなった。屋上を映したものだ。

中央近くにヘリが落ち、ヘリを出たシールズとテロリストが銃撃戦を繰り広げている。

警視庁テロ対策本部は静まり返っていた。

全員が驚きの表情を浮かべて画面にくぎ付けになっている。

「官邸を急襲したのはネイビーシールズです」

「誰があんな無謀な作戦の指示を出した」

「アメリカ大統領じゃないのか。しかし、死ねと言っているようなものだ」

「日本だって、同じようなことをしました」

梶元は無意識のうちに呟いていた。

確かに無謀で愚かだった。誤った指示で、すでに五十名近くのS  
ATの若者が命を落としている。これはすべて自分に責任がある。

「ドナルド大統領と回線をつないでください。盗聴不可の回線で」  
画面から目を反そらせた梶元が秘書に言った。

「現在、アメリカ、ワシントンDCの時間は——」

「時間は構わないから、出るまで鳴らし続けてください」

「ホットラインを使われたらどうです。現在は、緊急時です」

「いや、通常の外交電話でいい。私はひどい言葉を使いそうだ」

ホットラインは公式記録として残される。

#### 4

ノックと共に、補佐官の一人が大統領執務室に駆け込んできた。

「シールズが全滅しました。ヘリ二機に分乗して総理官邸に侵入し  
ようとしたのですが、反撃にあって撃墜されました」

「二機ともか」

補佐官が頷いた。

「国防長官はミサイル攻撃はフレアで回避できると言ってる——」

「テロリストはロケット弾を使いました」

「ネイビーシールズは米軍最強の特殊部隊ではなかったのか。今回の作戦の成功確率は八十パーセント以上だと聞いた」

「地の利がなかったのかも知れませんが。東洋の国です」

「テロリストを刺激しただけか」

どこであろうと関係ないという言葉を飲み込み、大統領は肩を落として呟いた。

テーブルの上のスマホが鳴っている。

ディスプレイには非通知の文字が出ている。ナンシーからか。

大統領は一度深く息を吸って、スマホをタップした。

「私は全力を尽くして、娘の救出を試みている」

〈スーザン・ハザウェイが娘であることは認めているんだな〉

男の声が返ってくる。

大統領は、首席補佐官に向かってスマホを指して出て行くよう合図した。

「おまえは誰だ。ナンシーと関係ある者か」

〈シールズは残念だったな。無謀で愚かな作戦だった。ああいう作戦の立案者は首にするんだな。娘のスーザンは私の仲間が預かっている〉

「この電話は日本からか」

「そんなことより、娘の心配をした方がいいのではないのかな。異国の地で、さぞ心細い思いをしているだろう」

「スーザンは無事なのか。少しでも傷つけたら——アメリカ合衆国大統領の名にかけて、必ずおまえたちを抹殺してやる」

「大統領がそんな不用意で感情的な言葉を言っているのか。ただでさえ反発が多いんだろう。命取りになりかねないぞ」

「なにが望みだ。二億ドルとアラスカでのシェールガスプロジェクトの中止は、おまえたちが送ってきた要求だ。少し時間が必要だ。いま、その準備をやっている。その他に何かあるのか」

「もう一つあっただろう。私たちの要求はそれを入れた三つだ」

「ジェームズ・レポートの公表だったな」

「その確認と注意事項だ。あんたは、総理官邸にシールズを送り込んだ。テロリストとは取引をしないと云っている。それが意味することは分かっているだろうな。アンダーソン国務長官の命ではなく、あんたの娘、スーザン・ハザウェイの命だ」

「スーザンは元気なのか。それなら、声を聞かせろ」

「二億ドルとプロジェクト中止、ジェームズ・レポート公表の用意はできているのか。そっちが先だ」

電話は唐突に切れた。

首席補佐官がスマホを耳に当てたまま入ってきた。

「通話先の特定はできませんでした。相手も逆探知されることを考えているのでしょうか。通話時間の制限に加えて、何か特別な方法を

取っています。技術レベルはかなり高度です」

「ジェームズ・レポートはどうなってる。ホワイトハウスとは関係ないルートで公表は可能か」

「問題ありませんが、プロジェクトには大きな支障が出ます。環境保護庁が黙ってはいません。大騒ぎになるでしょう。公表はしないということでは解決したのではないのですか」

大統領は無言のままだ。まだ電話の声が耳の奥に残っている。

「金の都合はつくか。表に出ない金だ」

「二億ドルでしたね。問題ありません。日本も要求に応じたのでし  
ようか」

「おそらくな。金の要求さえ表ざたにしなければ、もう一つの難民受け入れは、世界が歓迎する要求だ。使いようによつては、プラスに働く。金の要求のカモフラージュにすぎんが」

大統領は考え込んだ。我が国への要求は、それとは違う。明らかに、自分への挑戦だ。再選を阻はばもうとしているのか。ある強い意志を持ったものだ。

「あとは、プロジェクトの中止だ。これは、しばらく待ってみよう。早急に答えを出すには影響が大きすぎる要求だ」

大統領は窓際に立った。脳裏には写真の女性が浮かんでいた。確かに自分に似ている。しかし聡明そうな目と、意志の強そうな口元を見ると、自分よりもナンシーに似ているのか。何としても助けた  
いが、ワールド・エナジー・カンパニーのCEO、スチュアート・

ランケルとの関係も絶つわけにはいかない。

冷静になると、様々な思いが押し寄せてくる。

政治というのは、単純なものではない。様々な要素が複雑に絡み合って、一つの方向に向かう。歯車の一つが狂えば、行き着く先が大きく変わることもある。命取りになるモノもある。ここは、慎重に動かなければならない。

「現在のジェームズ・レポートについては——」

「握り潰しています。その存在を知る者は少数です」

「テロリストは知っていた。リストを作れ。レポートの存在を知っている者のリストだ。その中で怪しい者は全員拘束しろ。州警察、FBI、CIA、テロに対抗する組織を総動員してやれ。今回のテロの容疑者として尋問するんだ」

大統領は拳を握り締めた。見つけたら、容赦はしない。

「時間を稼げ。その間に、何としても人質を救出しろ。日本政府は何をしてる」

「大統領、日本の梶元副総理から電話です」

秘書が入ってきて告げた。

「ここに持ってきてくれ。いや、執務室で話そう」

どうせネイビーシールズの攻撃についてに決まっている。アメリカ独自でやったのはマズかったか。おまけに、失敗して全滅した。アメリカ国民、いや世界が見ているはずだ。しかし、日本は何をやっている。二度失敗して、後は指をくわえて見ただけだ。



「これで、アメリカの威信はまた落ちたな」

自分に言い聞かせるように口の中で何度も繰り返した。

〈大統領、ほんの数分前、日本で起こった惨劇はご存知ですか〉

受話器の向こうからは、のんびりした口調の声が聞こえてくる。

だが、前の印象とは違って、絞り出すような重苦しい響きだ。ある意思が感じられる。大統領は受話器を握り直した。

「テロリストがロケットランチャーを持っているとは。我が国から持ち出したモノだが、それが貴国にあり、それも官邸に持ち込まれていた」

暗に日本側の警備の不備を匂わせた。

〈あなた方は、それを知っているにもかかわらず攻撃を実行した。その理由は何なのです〉

梶元が平然と言い放った。

精一杯の皮肉を言ったつもりだが、梶元には通じていないのか。

「軍が敵を甘く見ていた。もっと慎重になるべきだった」

〈我々ともっと連携が取れていたら、こんな結果にはならなかった。

そうは思いませんか〉

「では、日本サイドに、シールズと共に突入の意思はあったのかね」

〈状況によります。今回は早急にすぎました。今後は、勝手な行動は慎んでもらいたい。人質の命にも関係することです〉

「我が国は国民の生命と権利は国を挙げて護る、という意志があります。そのためには多少の犠牲は仕方ない」

〈多少の犠牲——ですか。この一日の間に多くの若者が命を失った。私の心は引き裂かれる思いだ。今後は勝手な行動はつつしんでいただきたい。若者の無意味な死を回避するのは、我々老いぼれの役目です。今後はさらに情報を共有して、問題解決に協力していただきたい〉

「分かりました。ぜひ、そう願います」

電話を切った後、大統領はしばらくそのまま動かなかった。

自分の指示で二十名を上回る自国の若者が死んでいった。今まで戦場では死は当たり前だと思っていた。気に留めたこともない。しかし今は、顔も声も知らない若い兵士たちの魂が重くのしかかってくる。若者の無意味な死を回避するのは、我々老いぼれの役目——か。大統領は口の中で呟いた。

「犠牲になったシールズ隊員の経歴を送るように手配してくれ」

大統領は秘書に告げた。

「何かある」

受話器を戻してから、梶元は呟いた。大統領は何かを隠している。あの大統領はもっと冷酷で、無節操なはずだ。梶元の言葉に大して反論はしなかった。言葉を詰まらせさせた。

人質のことを思い描いた。あの無謀ともいえる作戦には理由があるはずだ。人質の救出か。だとすると、彼は誰を救出しようとしたのだ。新崎総理ではない。では、アンダーソン国務長官か。一人の

閣僚にあれだけの犠牲を払う大統領か。ノーだ。駐日アメリカ大使  
夫妻でもない。では——ワシントン・ポストの政治記者、スーザン・  
ハザウェイ、プリンススか。この女性は何者なのだ。

梶元の脳裏を様々な思いが交錯こっさくしていた。

秘書が出て行きドアが閉まった直後に、大統領のスマホが鳴り始  
めた。

首席補佐官の合図でスマホをタップした。

〈準備はできてるかね、大統領〉

「スーザンが生きているという証拠が見たい」

〈お互いの信頼関係でということにはいかないだろうな〉

「当然だ。おまえたちは、あまりに簡単に殺しすぎる」

〈それは政府も同じではないのか。戦時もそれ以外にも。ただ、合  
法的にやるだけのことだ。国民はそれに気付きさえしない。だが我々  
はやられる前にやる。殺されるまで待つてはいないということだ〉

「もし、スーザンを多少でも傷つけていたら——」

〈そういう言葉は聞き飽きてるんだ。ところで、あんたはスーザン  
と話したことはあるのかね〉

テロリストの笑いを含んだ声に、大統領は答えることができない。

〈声を聞いて、スーザンだと分かるのか〉

「私の娘だ。当然だろう」

大統領は自信を持って言い切った。

へでは、一時間後、もう一度電話する。その時までには十分な準備をしておくんだな。娘が泣き叫び、命乞いをするのを聞きたくなかったら」

「なぜ、そんなに時間がかかる。一緒にいるのではないのか」

「私はアメリカだ。スーザンは日本だ。安心しろ、大切に扱われている。今のところは」

やはり唐突に電話は切れた。

首席補佐官がスマホを手に首を振っている。発信者の特定はできなかった。何らかの方法で妨害しているのだ。

「ナンシー・ハザウェイと話したい。電話番号は分かるか」

「お待ちください」

首席補佐官がスマホを操作した。

「送っておきました。私はしばらく席を立ちます。電話がすんだら、呼んでください」

大統領は送られてきたスマホの番号を押した。

呼び出し音が鳴り始めると同時に声が返ってくる。

「チェスね。スーザンが救出されたの」

「まだだ。しかし、時間の問題だ」

「簡単じゃないんですよ。あなたの声の調子から分かる」

「全力を尽くしている。どうか、祈っててくれ」

「分かっている。あなたを信じるほかないものね」

「テロリストたちは私とスーザンを話させると言っている。私はス

ーザンの声も、趣味や習慣、好きな食べ物、スポーツ、その他のことも何も知らない」

スマホは沈黙した。しばらくたって、声が返ってくる。

音質はよくないが、声自身は鮮明で、大統領の耳にすんなりと入ってくる。

「ママなの、今夜は本当にいないんでしょうね。居留守は嫌よ。怒ってるのなら、ごめんなさい。誕生日に帰れなくて。私は現在パリ。フランス大統領選の取材よ。きつと革新派が勝つ。アメリカもそうだといいんだけど。でも、今度の大統領選はきつと接戦になるわね。あいつは、嫌な奴だけど、なぜか心底嫌いにはなれないの。可愛いところもあるでしょ。ママもそうなんですよ。テレビであいつが出ると、じっと見てるでしょ。ママの目つき変よ。まるで、あいつの魔法にかかったみたい。じゃ、来週は帰るからね。愛してる、ママ」  
声は次の通話に変わった。

「明日から中国と日本。アンダーソン国務長官担当よ。国務長官直々に私を指名してくれたの。二度しか会ったことがないのにね。でも、東洋は初めて。すごく楽しみよ。お土産、何がいい。ママのズボンより」

生き生きとして知的な声だ。これがスーザンの声、話し方か。大統領はその声を心に刻み込んだ。

「留守番電話に入っていたスーザンの声よ。私はTシャツを頼んだ。日本の紅葉の写真がプリントされてるの。昔、スーザンが着てたの

よ

「いい娘、らしいな」

〈最高の娘。だから、必ず無事に私のもとに帰してよ〉

後半は涙声になった。

「大丈夫だ。アメリカ合衆国大統領の地位をかけて誓う」

今度は、三人で食事だ、声に出さずに言うと言電話を切った。

5

ライアンは窓際に立ち、庭で燃えさかるヘリの残骸を見ていた。炎は周りに倒れている十人近くのシールズ隊員の遺体を浮かび上がらせている。

時折り小規模な爆発が起こった。積んでいた弾薬が熱で爆発しているのだ。

ネイビーシールズは全滅させたが、味方の損害も無視できない。この数時間で十名以上の仲間を失っている。

五階の壁を破壊して、ロケット弾を撃ったのは誰だ。銃撃され、手榴弾も投げ込まれている。やはり、夏目という女警護官か。

仲間の死にすべて関係しているのは、この女だ。おまけにプリンセスまで一緒だ。アメリカからの指示では一時間以内に解決しなければならぬ。残された時間はあまりない。ライアンは受話器を取った。

「邪魔が入ったが、片付いた。さあ、続きをやろう。事故の間、私は時計を止めるなんて悠長なゆうちやうことはしない。前の通話からすでに一時間がすぎている。とつくの昔に時間切れだ」

ライアンの声が官邸内に響いた。

足元にひざまずいた女が、胸の前で手を合わせて目を閉じている。

「目を開けて、こつちを見る。おまえは夏目という警護官の代わりに死ぬんだ。泣き叫んでもいいぞ。恨みの言葉を言ってやれ。一発で片をつけるのは、私の情だ」

銃を額ひたいにつけると女が悲鳴を上げた。ライアンは指先に力を込めた。銃声が轟く。

「一人、死んだぞ。日本人女だ。彼女を殺したのは、夏目警護官、おまえだ。三十代の官邸の事務員だ。子供がいると言っていた。いつか会って、状況を話してやれ」

遺体をのける、血を拭いておけ、部下が指示を出している。

「次を連れて来い。今度は若い男がいい。新崎総理も連れて来るんだ」

二十代の男と新崎が連れて来られた。新崎を椅子に縛るよう命じた。

「名前を名乗ってやれ。自己紹介だ。おまえを見捨てて、殺させることのないように頼むんだな」

「僕は——鈴木真一すずきしんいちです。二十三歳です。今年、官邸の事務員として——」

鈴木は途中から泣き出した。声にならない呻き声を発している。

「さっさと出てくるように頼め。時間切れになる」

「お願いします。出てきてください。僕は死にたくない」

「こいつの命はあと、二十八分だ。夏目警護官、どこで震えている」

ライアンは苛立ちの混じった怒鳴り声をあげるとマイクを切った。

「どうしても行くか」

明日香は高見沢に頷いて、拳銃と短機関銃を差し出した。

「これは持っておけ。俺も持ってる」

高見沢は拳銃を明日香に返した。

明日香とスーザンは部屋を出た。

懐中電灯の光の中に廊下が続いている。数人のテロリストと官邸職員の遺体が放置されたままだ。

「やはりあなたは残った方がいい。スーザンなんて女性は知らない  
と、言えば済むこと」

「本気でそう考えてるの。あなたが捕まるとテロリストは直ちに四階と五階を、徹底的に搜索する。私も見つかるし、高見沢さんまで捕まることになる」

テロリストは高見沢の存在を知らない。しかしこのままテロリストの前に出ると、どうなるのだ。自分は殺され、スーザンは――。

明日香とスーザンは三階に続く階段の前に来た。



「あと五分だ。ここには新崎総理もいる。おまえを解任した総理だ。次は彼女だ。何か言いたいことはないのか」

「出てくる必要はないわよ、夏目警護官。殺されるだけ。あなたは生き延びて戦いなさい。私たちは覚悟は——」

殴りつける音で声が途絶えた。

「私をこれ以上怒らせるな。すぐにでも、殺してやる」

ライアンの声が頭上で響いた。

明日香は腰の拳銃を抜いて、スピーカーに向けて全弾発射した。その拳銃を三階に向かって投げた。床に転がる乾いた音とテロリストの声が聞こえてくる。

「私はここにいる。これから三階に降りていく」

明日香は下に向かって怒鳴った。そして、ポケットから出したスマホを階段に落ちているテロリストのスカーフの下に滑り込ませた。スーザンにしばらく待つように言って、両手を上げて階段を降り始めた。

数人のテロリストが短機関銃を構えて飛び出してきた。

「武器を捨てろ」

「もう、何も持っていないよ」

テロリストは明日香のボディチェックをすると、短機関銃を首筋に突きつけて、三階の中ホールに行った。

新崎総理が、椅子に腕をガムテープで縛られて座っていた。

中肉中背の陽に灼けた男の足元に、若い男が座り込んでいる。こ

の男が鈴木真一で、次に殺されるはずの男だ。男は小刻みに震えていた。鈴木に拳銃を向けているのがライアンか。

「おまえが夏目明日香警護官か。写真通りだな」

ライアンが一步下がって、値踏みするように明日香を見た。

「この女が俺の弟を殺したのか」

突然、一人のテロリトが飛び出してきて、明日香の頬を殴りつけた。

殺してやると叫びながら、短機関銃を向けた。

「やめろ。こいつは人質だ」

「この女に多くの仲間を殺されてる。俺の弟は手榴弾で吹っ飛ばされた。手足はバラバラで、顔も誰だか分からない。俺は母親になんて言えばいいんだ」

「殺すのはまだだ。いずれ、好きにさせてやる」

ライアンは明日香に向き直った。

「おまえを殺したい奴は山ほどいるんだ。おとなしくしていれば、苦しまずに殺してやる」

ライアンは明日香の頬を平手で殴った。椅子に縛られている新崎の身体がびくりと反応した。

「アメリカ人の女はどうした。ワシントン・ポストの記者だ」

「そんな人、知らない。私は一人で戦ってきた」

「プリンセスだ。どこにいる」

ライアンは鈴木の前額に拳銃を突きつけた。

轟音と共に鈴木が悲鳴を上げて耳を押さえた。指の間から血が流れている。

「次はどこがいい。もう一方の耳か。メガネが掛けられなくなるぞ。それとも鼻にするか。警護官に決めさせてやる」

ライアンが明日香に視線を向ける。明日香は強く目を閉じた。  
「私はここにいます」

声と共に階段から降りてくるスーザンの姿が見えた。あたりは静まり返っている。

テロリストに囲まれて、スーザンがライアンの前に引き出された。

「あんたがプリンセスか。なぜプリンセスと呼ばれてる」

「私が知る訳ないでしょ。なぜだか、あなたに聞きに来たのよ」

「気は強そうだな。しかし、それも今の内だけだ」

部下の一人がスーザンの胸に手をかけた。

「この女は傷つけるな。アメリカサイドの指示だ」

部下を殴りつけると同時に、ライアンの鋭い声が飛んだ。

「プリンセスを捕えた。ただちにアメリカに連絡する。回線をつないでくれ」

ライアンがマギーに言う。

スーザンが明日香のそばに行った。明日香の身体にスーザンの震えが伝わってくる。